

川野先生への感謝の言葉

古　我　正　和

川野美智子先生は長年佛教大学で学部や大学院の教育・研究の指導にあたってこられた。博士課程を満期退学された先生は、結婚後ご主人と共に歩み、ご主人の勤め先に近い大学の方にも出講し同時に家庭の中で、お子さんの育児も重複しながら英米文学の研究を続けられた。そしてそれは互いに有機的に関連して成果となり、次のような著書となって結実した。

- * 『弧絶と連帯—1940年代の英詩人たち』 清水弘文堂 1974年
- * 『時ならぬ雨のなかに—ディラン・トマス研究』 山口書店 1990年
- * 『英米文学研究』（共著）佛教大学通信教育部 1998年
- * 『英米文学の花園—入門講義とテキスト』 大阪教育図書 2000年
- * 『現代史を告発する—アーサー・ミラーの半世紀』 英宝社 2000年
- * 『午後の遠景—T.S.エリオット研究』 大阪教育図書 2004年

これをみると、もう博士号を取られるには充分である。これは先生の一生を飾るものとなるであろう。このほか研究の対象としては、ブロンテ姉妹、シルヴィア・プラス、ヴァージニア・ウルフ、アイリス・マードック、キャスリーン・レイン、ウィラ・キャザー、アンジェラ・カーター、A.S.バイアットらの英米女性作家・詩人たちがあ

る。また、ユージーン・オニール、ロバート・ボルト、ピーター・シェーファ、ハロルド・ピンター、エドワード・オールビーらの英米の現代劇作家に関心をもっておられるとのことである。また現在考えておられるテーマは、ロレンス・ダレル、ジャネット・フレイムの文学で、これらに関して今後も書き続け

たいとのことである。「文学って、ほんとに！面白い！！」というのが、先生の率直な感想である。これだけではなく、以前私がちらっとのぞき見た中に、長時間の通勤電車の中で読むべく、西行の和歌の本があったことを覚えている。

ここに見られるものは、先生の御研究は幅広いもので、英米や男性女性の区別もなく関心の赴くままになされ、自由でどの作家にも効果的に切り込む、複眼的研究方法であることが分かる。

川野先生の指導を受けた学生によると、先生には当たりは柔らかくでありながら、安心していてもとんでもない羽目になるほど、厳格なところがあった。とりわけ大学院では、言葉の一つ一つについて語学的・文学的な本質に迫るアプローチがなされたという。そのことがどれほど深い感銘を彼らに与えていたことだろうか。その厳格さには、あくまでも学生の立場にたって、学生にとって最も望ましいことは何であるかという事が、常に考えられていたからである。その御指導を受けた人たちが、いま全国に散らばり、同じやりかたで次世代の若者たちを励ましているに違いない。

いま厳格なところと言ったが、それはいわゆる「さばる」学生には手厳しいということである。これは当然のことで、どこの大学でもこちらから入学者を呼び込まなければならない昨今の状況下にあっては、ともすると学生を甘やかせる風潮がある中であって、一つの模範を示していただいた。

現在では多くの女性が先生と同じ道を歩んでいるが、先生から教を受けた人たちが得た教訓が、その学問の在り方、学問への情熱、学識だけでなく、先生の歩まれた道、その苦労の多かった人生経験から生み出されたものであることを思うと、それが多くの人、とりわけ女性の英文学研究者たちに、どれだけ多くの励みとなったことであろうか。

先に述べた先生の厳格さも、他人に頼らずみずから開拓された先生の厳格な学問の在り方から生まれた、まさに「学問の王道」だと思われる。先生には他方で持ち前のすばらしい会話力があり、世界中を自由に旅行しておられた。どうか今後、先生の心の赴くままに、のんびりと好きな文学に親しまれ、またその堪能な会話力を駆使して世界中に旅するかたわら、ずっと佛教大学の研究・教育を見守っていただきたいと思う。